

## 218. 平成5年度滋賀県下における 発掘調査の紹介(その3)

### 19. 古墳時代の石組みカマド

能登川町佐生 さき よこうけ  
横受遺跡

神崎郡能登川町佐生に所在する横受遺跡は、能登川町の東部にある和田山と織山東端部(通称佐生山)の間の自然堤防上に位置している。横受遺跡の北側には弥生中期から奈良時代にかけての大集落であり、これまで数次にわたって調査がされている中沢・斗西遺跡が存在する。

今回の調査は民間宅地開発に先立ち平成4年9月から平成5年11月の間、約15,600㎡の面積で調査を実施した。その結果、古墳時代の集落跡、平安時代の河道、鎌倉時代の集落の跡などが確認された。

古墳時代の遺構で注目されるものにカマドの焚口部分を鳥居状に石で組んだ竪穴住居がある。この竪穴住居は大きさ約4.4m×4.7mの方形で、北東コーナー部分にカマドが作り付けられており、南側に張り出し部がある。まわりの竪穴住居が深さ約10cm程度なのに対して、深さは約40cmもあり良好な状態で検出された。鳥居状に組まれた石の天井部分は、片方が転落しており、石の内側は火を受けて赤く変色していた。カマドの中央には支柱石があり、カマドの奥からまっすぐに延びる長い煙道(長さ約1.8m)も確認された。この竪



石組みカマド

穴住居は出土した土器から7世紀初頭のものと思われる。

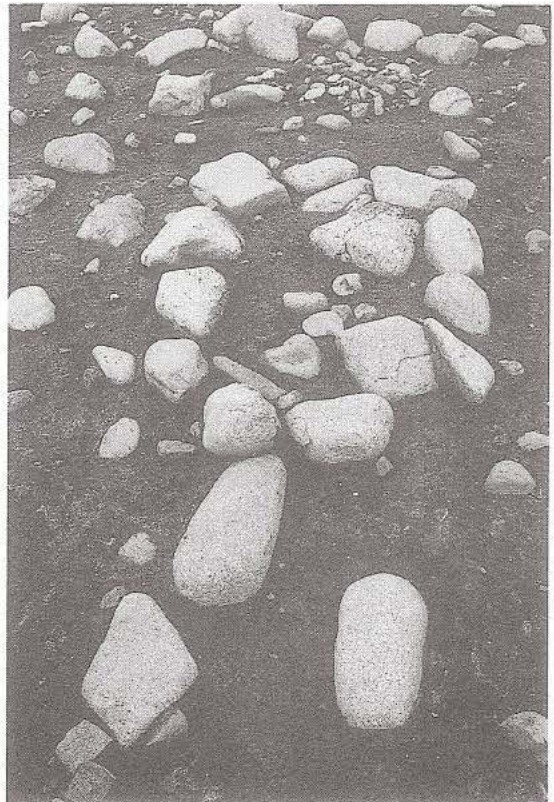
カマドの焚口部分を鳥居状に石で組む例は、普通のカマドが土で構築されているのに対して特異な例である。北部九州や信州・関東地方には石や土器でカマドの焚口部分を組んだものがあるが、近畿地方では現在のところ確認できず、関東地方との関わりがうかがわれるのではないだろうか。今後整理作業が進む段階で詳細な点が明確になるであろう。

(能登川町教育委員会 杉浦隆支)

### 20. 縄文時代後期の配石、住居群

甲良町小川原 こがわら こがわら  
小川原遺跡

本遺跡は、県営ほ場整備事業に伴う事前調査で平成2年度よりの継続調査である。本年度は昨年度までの調査と同様で、第1遺構面からは奈良時代頃の掘立柱



円形配石遺構

建物1棟、ピットなどを検出した。第2遺構面からは縄文後期前葉の配石遺構・集石遺構、平地式住居、土坑、ピットなどを検出した。配石遺構は人頭大の礫を円形に約1m程の径で設置したものなどがあり、集石遺構には約2～10cm程度の小礫を数十～数百個円形に集めたものなどがある。構成する礫の中には、磨痕のあるものや、打ち欠き痕のあるもの、赤化痕のあるものなどもある。

平地式住居は、配石・集石遺構の設置前に作られており、それらと重複関係にある。平地式住居は、焼土の数から4棟程度は確定できるが、遺構集中地区では足の踏み場もないほどの遺構があるため、本来はかなりの数の住居が存在していたものと考えられる。

(勲滋賀県文化財保護協会 中村健二)

### 21. 山岳寺院の本堂跡基壇の調査

米原町上丹生 松尾寺遺跡

松尾寺遺跡は平安時代から江戸時代にかけての山岳寺院跡である。盛時には山中に50を越える坊院が存在していたようである。現在も坊院跡と思われる人工的な平坦地が数多く遺存している。

ところが、近年土砂崩れ等の自然災害によって、遺跡の一部が消失してしまう恐れが生じてきた。

そこで遺跡の全体像を把握することが急務となり、平成3年度より地形測量と発掘調査に着手して現在に至っている。

平成5年度は江戸時代再建本堂（昭和56年の豪雪で倒壊）の基壇についての調査を行った。調査のポイントは、基壇の造成方法とその過程における祭祀行為の有無、ならびに前身建物跡を含めた下層遺構の確認の2点においた。

まず基壇の造成方法についてであるが、松尾寺の本堂の場合、自然地形をうまく活かして造られている。もともとの地形が周辺より高かったり岩盤が露頭している箇所は、それらを利用して基壇の高さをかせぎだして盛り土を最小限に留める工夫がなされている。ま



松尾寺本堂跡基壇調査状況

た、寺院建物の基壇に一般的に見られる版築工法は採用されていなかった。

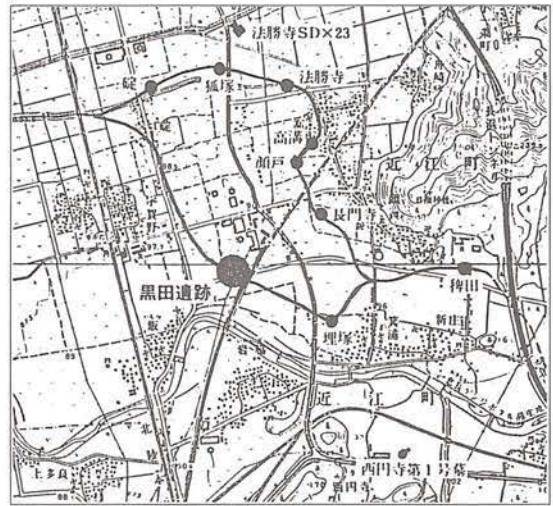
次に地鎮行為についてであるが、今回の調査ではそれと思われる箇所が4箇所確認されている。ここでは完形の土師器皿を1～2枚使用して行われている。

下層遺構の確認については、上層遺構の現状維持という観点から、下層までの掘り下げを最小限に留めたので、明確にはできなかった。

(米原町教育委員会 土井一行)

### 22. 古墳時代前期の環濠集落

近江町顔戸 顔戸遺跡群



顔戸遺跡群の環濠復原ライン

近江町の北東部を画する横山丘陵の南端域には、塚の越古墳・狐塚5号墳・山津照神社古墳に代表される後期古墳群「息長古墳群」が形成されている。近年、京都大学文学部考古学研究室との合同調査によって、同古墳群の中期よりの系譜を追うことが可能となり始めている。一方、近江町教育委員会では、同古墳群の西隣りの平野部において、集落遺跡の調査を進めてきたが、今回、この集落遺構が古墳時代前期の環濠集落であることをつきとめ、広義の意味で「顔戸遺跡群」と呼称している。

顔戸遺跡群は、南北1.5km・東西0.8kmの規模をもち、南西端の稗田地区より引水し、南北に分岐した後、北西端の土川地区に連がるものと復原される。環濠要所では、集落遺構（顔戸遺跡・狐塚遺跡・礎遺跡）や祭祀遺構（高溝遺跡・黒田遺跡）が調査され、その結果、各検出遺構が、一連の環濠集落遺構と想定されるに至った。なお環濠の中心部には、管理水田跡の存在が予測され、今後の調査に期待が持たれる。

今年度の調査は、環濠引水部の稗田地区と、流末部狐塚地区を中心に実施した。まず稗田地区は、「式内社

日撫神社の正面に位置し、流路を確保するために、南隣に土塁状の道路遺構が併設されていることが確認された。また狐塚地区は、弥生・古墳時代の墳墓群を北接させながら、現存の「琵琶田川」に沿って環濠を西進させることが明らかにされた。

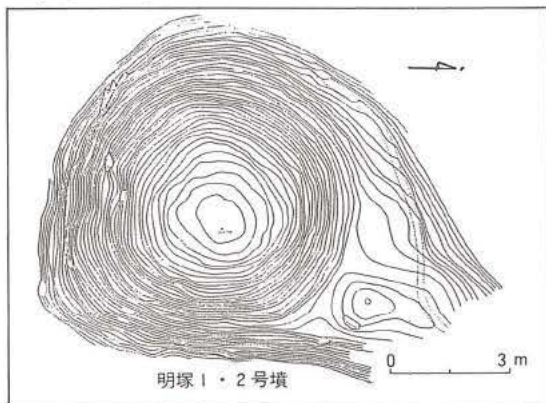
調査の概要については、近江町教育委員会が平成5年度に刊行した『黒田遺跡3』と、6年度に刊行予定の『近江町埋蔵文化財調査集報1』を参照されたい。  
(近江町教育委員会 宮崎幹也)

### 23. 近江町甲塚1・2号墳と顔戸山砦1号墳の測量調査

近江町 息長古墳群

- 甲塚1・2号墳（1992年8月、9月調査）
  - ・横山丘陵南部の南北にのびる尾根上に位置する。墳頂部の標高約204m。
  - ・測量の結果、1号墳は直径43m、高さ6mの円墳。湖北の円墳としてはもっとも大きなものとなる。2号墳は1号墳の造出しの可能性もある(下図)。
  - ・1号墳は葦石をもつ。埴輪は確認できない。
- 顔戸山砦1号墳（1993年8月調査）
  - ・横山丘陵南部の北東から南西に伸びる尾根の頂部に位置する。墳頂部の標高約248m。
  - ・中世の山城によって地形は大幅に改変されている(中世陶器等採集)。
  - ・従来は前方後円墳と認識されていたが、測量の結果では次のような3つの可能性が考えられる。

- ①北側の崖面裾の平坦部が前方後円墳のくびれ部とし、前方部を東へ向けた全長50mクラスの前方後円墳にあたり、この場合南側がほとんど整形されていないことになる。
- ②標高246m以上が古墳の範囲で、西南部に低い造出しをもつ古墳。ただ頂上付近には封土の堆積がほとんど残っていないくらいに、削平を大きく受けているものと考えられる。



近江町甲塚1・2号墳 S=1/1000

③標高247m以上の範囲のみ墳丘残存部分と考える。削平を大々的に受けている。径20m未満の円墳。

・葦石などの外部施設は確認できないが、以前に尾根の低部からB種横刷毛目調整をもつ円筒埴輪片が採集されている。

甲塚1・2号墳、顔戸山砦1号墳をふくむ息長古墳群中では、豊富な副葬品を出土した山津照神社古墳と、石見型盾形埴輪や木柱の痕跡が発見された塚の越古墳が、後期の前方後円墳としてよく知られている。こうした前方後円墳が生み出されるに至った系譜を追究することが、息長氏、坂田氏等との関連が注目されるこの地域の古墳時代を考える上で課題となっている。

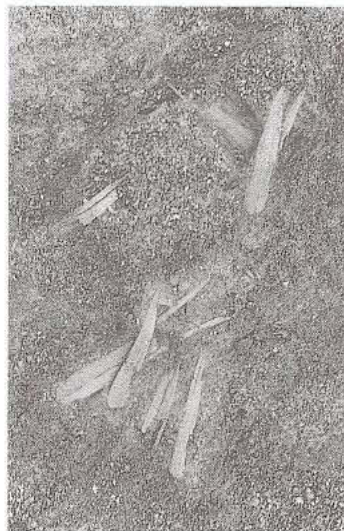
今回の測量調査によって、そうした平野部後期前方後円墳に先行する、丘陵上の古墳の実態を明らかにすることができた。調査の結果、甲塚1号墳は規模の大きな円墳であることが判明した。顔戸山砦1号墳については墳形を明確にすることはできなかったが、古墳群中ではやくに埴輪を採用した可能性のある古墳として重要である。今後は墳形の細かい部分が明確でない山津照神社古墳などについても、基礎的なデータを積み重ねて行く予定である。

(京都大学文学部考古学研究室 高橋克壽・森下章司)

### 24. 律令期の祭祀遺物が出土

長浜市大茂亥町 大茂亥遺跡

大茂亥遺跡は長浜市大茂亥町に所在し、長浜新川改修工事に伴って今回第5次調査が行なわれ、奈良時代後半から平安時代にかけての自然流路が検出された。自然流路からは多数の祭祀関係の遺物が出土した。斎串50点以上、人形20点、銅製の貨銭、斧や鎌等の鉄製品、馬銜や机等の木製品、祭祀に関連するかどうかは



斎串・人形同位置出土状況

定かではない、獣骨(偶蹄目と思われる)などである。

斎串は大小様々のものがあるが、形はどれもほぼ同じで、山型の圭頭を有し、圭頭の両肩の少し下に切り掛けを刻む典型的なものである。斎串は単独で出土したものもあるが、4、5枚が重なって出土したものもある。人形は烏帽子を表現したもの

や、人面墨書のあるもの、中には体部に墨書（文字か記号）がみられるものもある。人形はほとんど単独で出土したが、同じ材質、木取りをされた斎串7点とともに一括で出土したものもある。これらの出土状況は斎串、人形の使用方法、使用時のセット関係等を知ろうえて、重要な資料となり得る。

流路のなかにもかかわらず、遺物の出土状況が良好であることからみて、これらの遺物が「祓え」に伴うものと仮定すると、「祓え所」は比較的近くに存在したと考えられる。大戌亥遺跡の東方約2kmの位置には坂田郡衙推定地とされる大東遺跡があり、今回の調査で得られた資料等と合わせて考えてみると、比較的規模の大きい「祭祀」、あるいは「祓え」が行われた可能性がある。

鴨田遺跡は現在も調査中で、中世の集落跡が確認されている。（財）滋賀県文化財保護協会 重田勉

## 25. 弥生時代から古墳時代の大集落発掘

長浜市西上坂 にいさかちょう 大塚遺跡 おおつか

長浜市西上坂町・新栄町に所在する大塚遺跡は、12度にわたり調査されている。今回の調査は、民間開発に伴う調査で平成5年1月から平成5年10月まで実施した。

調査対象面積（4,883㎡）の内、約4,000㎡について調査した結果、調査区全体において竪穴式住居約50棟（内円形住居を含む）、掘立柱建物約30棟以上、棟持柱建物1棟、土坑状遺構約50穴、溝状遺構約30条、柱穴状遺構500穴、壺棺墓1基等を検出した。竪穴住居・掘立柱建物については、遺構の重複及び建替えが観られる為件数等に検討を要する。各竪穴住居には、カマドか炉跡を有しており、サイズ・形状等に違いが観られる。炉跡からは、骨片が出土している。

棟持柱建物の特徴は、妻柱外側約2mに棟持柱があり桁側柱列の掘形が布掘りで幅0.7m、深さ0.7mで柱根は残存していないが桁行4間、深行2間の建物である。



竪穴式住居検出状況

今回の調査区南側で圃場整備に伴い調査が実施されているが、棟持柱の特徴をもつ建物が検出されている。（長浜市教育委員会 森口訓男）

## 26. 弥生末の周溝墓群を検出

長浜市大戌亥町 かみた 大戌亥・鴨田遺跡

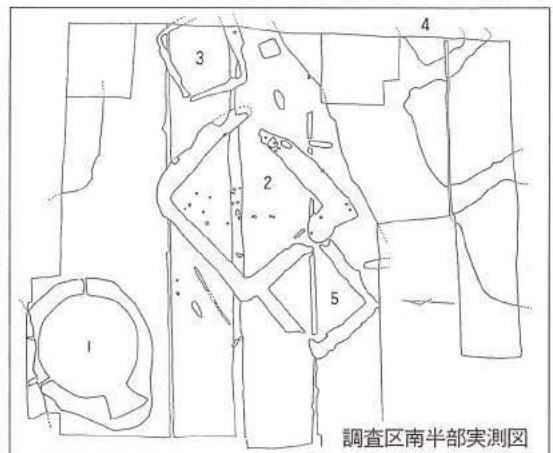
この地域は、大戌亥遺跡と鴨田遺跡に挟まれた周知の遺跡の範囲外とされている。しかし都市計画事業や長浜新川に伴う調査によって、両遺跡の間にも遺構が広がっているのが確認され、今回の調査地においても遺構の存在が十分予想された。そのため、市長長浜病院移築に先立って、約60,000㎡を対象に試掘調査を行い、その結果をもとに保存を免れない部分、約10,000㎡について調査を実施した。

その結果調査区北半部から、古墳時代初頭を中心とする竪穴住居5棟、掘立柱建物4棟、さらに大量の遺物を含む自然流路などが検出された。またこの自然流路を境界線として、調査区南半部からは、弥生時代後期末に築造されたと思われる、直径約15mの墳丘部に、長さ約4m、幅約6.5mの張出し部を持つ帆立貝形周溝墓が1基（図中1）と、およそ19m×15mを最大とする方形周溝墓が少なくとも3基（同2～4）、またその溝の一辺を利用して築造されたと思われる古墳時代中期前半頃のもの1基検出されている（同5）。

これらの周溝墓群は、後世の開墾によって墳丘部分をすべて失い周溝のみになっているが、調査の結果、帆立貝形周溝墓から祭祀遺物を含む多量の木製品を得た。しかし、方形周溝墓群からは木製品の出土はほとんど見られなかった。

今回調査を行なった地域は、帆立貝形周溝墓から出土した鬚形状木製品をはじめとして、円形プランと方形プランの墓制の同一地区での築造、木製品出土の格差など、注目すべき点が数多く存在する。

（長浜市教育委員会 池寄陽一）



調査区南半部実測図